

# 能越自動車道関係

## 埋蔵文化財包蔵地調査報告

———— N E J - 08 遺跡 ——

1995

財團法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

## 序

能越自動車道は、北陸自動車道の小矢部ジャンクションから県西部を縦断して北上し、石川県輪島市に通じる道路建設計画です。能登地域は古代には現代と異なり、越中国に編入されるなど非常に繋がりの深い地域でした。これから北陸の発展をめざす時、両地域の活性化に寄与するための交通網の整備が急務となつてまいりました。

当調査事務所では建設計画に伴い平成4年度から継続して発掘調査を実施し、五社遺跡・開辻大滝遺跡・石名田木舟遺跡・地崎遺跡の調査が終了しました。

本書は、N E J - 08遺跡の範囲や遺物の遺存状況などの概要を知るために実施した発掘調査の結果を報告したものです。この調査の成果が、今後の遺跡の理解や研究の一助になれば幸いです。

最後に、今回の調査に当たり、格別のご協力とご配慮を戴いた関係各位に、深く感謝の意を表するしだいです。

平成7年3月

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所  
所長 桃野 真晃

## 例　　言

1. 本書は、平成6年度に高岡市笹川地内の能越自動車道建設予定地内で実施したN E J - 08遺跡の調査報告である。
2. 調査は、富山県教育委員会の決定に基づき、財団法人富山県文化振興財団が建設省北陸地方建設局からの委託を受けて実施した。
3. 調査は、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の調査第一係係長池野正男・同文化財保護主事三島道子・武田健次郎・森本英津子・柴口真澄が行なった。また、富山県埋蔵文化財センター企画調整課文化財保護主事河西健二の指導・協力を得た。
4. 調査期間は、平成6年6月6日から7月4日の17日間である。
5. 本書の執筆は、池野・河西の他、同事務所調査第一係主任酒井重洋が行い、文責は文末に記した。
6. 出土遺物及び記録資料は、当埋蔵文化財調査事務所が一時保管している。

## 目　　次

### 序

### 例言

### 目次

I. 位置と環境	1
II. 調査の経緯	1
図1 遺跡の位置	2
III. 調査の概要	3
(1) 調査対象地	3
(2) 基本層序	3
図2 基本層序模式図	3
表1 基本層序観察表	3
(3) 検出された遺構	4
図3 南北方向層序断面模式図	4
図4 試掘トレンチの位置と遺跡の範囲	5
図5 上層・下層の遺跡の範囲	7
(4) 小括	10
(5) 出土遺物	11
図6 繩文時代の遺物	11
図7 弥生時代から中世の遺物	12

写真図版

## I. 位置と環境

N E J-08遺跡は庄川の氾濫によって形成された砺波平野の扇端部に位置する。当地域は地下水位が高いため湿地帯が多い。この豊富な伏流水を利用して養鰻業が盛んである。また、江戸時代以降、戦前まで湿地帯で栽培された音を編んだ菅笠作りが盛んで、当地域の重要な産業であった。しかし、現在は、ほ場整備によって乾田化が進み穀倉地帯に生まれ変わった。

砺波平野の西側を小矢部川が北上して流れる中流域と平野北側に広がる稻葉山丘陵に流れを遮られ北東に方向を変え高岡市伏木で日本海に注ぐ下流域に別れる。左岸の中・下流域は狭い段丘上から丘陵上かけて数多くの遺跡が知られている。古くは旧石器時代から中・近世までの遺跡が連続と認められるが、古墳時代から古代の遺跡が特に顕著である。このうち古墳は蟹谷丘陵、砺波山丘陵、稻葉山丘陵上に300基以上あると推定されている。古代の北陸道のルートは加賀との国境である俱利伽羅峠を越え平野部に下って段丘上に入り、小矢部川に沿って左岸を北東に進み越中国府に入る説が有力である。さらに、官道に設置された坂本、川合駅を左岸域に求める説が大勢であるが、比定地には諸説がある。また、道林寺遺跡から「郡」墨書き土器が出土し、古代砺波郡衙を中心とした流域の小矢部市松永周辺に比定する説が浮上している。

「和名抄」には砺波郡の郷名は十二郷が記される。比定地には諸説があり、不明な点が多い中で小矢部市桜町遺跡から「長岡」や「長岡神祝・大祝」などの長岡神社に関連する墨書き土器が出土し、長岡郷に比定されている。また、下流の高岡市板屋周辺に絵岡から東大寺領須加庄を当てる説が強い。

このように古墳時代から古代にかけての左岸中・下流域は遺跡密度が高く、重要な遺跡が多い。これに対し右岸中流域は中世の木舟城を除けば遺跡の空白地帯であった。しかし、道路建設に伴う各種の調査によって遺跡は増えている。その中でも、石名田木舟遺跡は小矢部市から福岡町にまたがる約1kmにも及ぶ大規模な複合遺跡で弥生時代から近世の造構、遺物が検出している。中流域の主体になる時代は古代と中世であるが、中世の遺跡が多いのは木舟城城下という特殊事情による。

下流域に進むに従って弥生時代の遺跡が増える。福岡町下老子遺跡は700mにも及ぶ大規模な弥生時代の遺跡でN E J-08遺跡も連続して通がる同一遺跡である。

## II. 調査の経緯

当埋蔵文化財調査事務所では平成4年度から各種の調査を実施している。平成4年度は本線に係る小矢部市五社遺跡を本調査した。五社遺跡からは古代（10~11世紀）、中世（12~13世紀）の2枚の文化層が確認され、多くの掘立柱建物が検出された。また、3年度に県埋蔵文化財センターが実施した本線内（福岡町開辟・下老子地内）、国道8号線小矢部バイパスのアクセス内（小矢部市芹川・福岡町木舟地内）の分布調査結果に基づき、計29haを対象に範囲確認調査を実施した。その結果、本線内で開辟大滝・江尻・蓑島・下老子の4遺跡、アクセス内で石名田木舟遺跡が確認された。

5年度は昨年にひきつづき五社遺跡と昨年範囲が確定した開辟大滝・石名田木舟遺跡（木舟地区）の本調査をおこなった。五社遺跡からは古墳時代の竪穴住居、古代（9世紀）の掘立柱建物が、また、開辟大滝・石名田木舟遺跡からは木舟城の城下の一角をなす建物群が確認された。

6年度はN E J-08遺跡の範囲確認調査と五社・石名田木舟遺跡（小矢部市側）の本調査を実施した。範囲確認調査は2次目で、平成5年の県埋蔵文化財センターの分布調査結果に基づき行った。その結果、対象地の大部分が遺跡であることが判明した。本調査では、五社遺跡からは古代・中世の掘立柱建物が、また、石名田木舟遺跡からは円墳や古代・中世の掘立柱建物を多数検出している。

（池野 正男）



図1 遺跡の位置

### III. 調査の概要

#### 1. 概要 (図4・5)

##### (1) 調査対象地

調査対象地は高岡市、福岡町境から高岡市側に長さ約1,280m、幅60mで、面積は約76,800m<sup>2</sup>である。現況は水田で、調査地のはば中央には幅2mほどの排水路が通っている。この一帯は昭和38年頃に大規模な圃場整備が行われており、現況地形は大きく変化しているものと思われる。現況の標高は南側で17.9m、北側のJ.R北陸本線際で13.3mである。特に北陸本線近くで大きな段差がみられる。

試掘トレレンチは南側より1トレレンチとし、調査区中央に排水路があるために、農道毎に折り返して順次北側へ進み、総計で131トレレンチを設定した。

##### (2) 基本層序 (図2・3、表1)

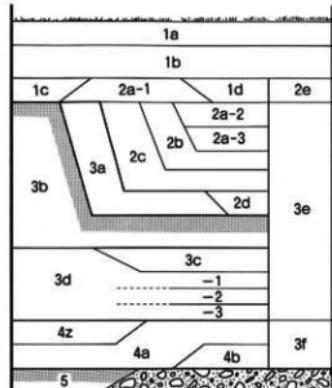


図2 基本層序模式図

約1,280mの距離があるため地点によって相当の差違が認められたが、基準となる層を追いかけることによって、調査地全体の基本層序模式図を作成した。模式図は相対的なもので深さを単純に表すものではない。観察表の分布は層の存在する範囲をあらわし、土質は代表的な色・質であるが、谷や微高地によって変化するため、一様ではない。

鍵となる層は2c層、3a層、3b層、4a層、5層で、2c・3a層は古代・中世以降（以下上層）の包含層、3d層は上層の遺構検出面、4a層は繩文・弥生（以下下層）の包含層、5層は下層の遺構検出面である。

上層の包含層（2c・3a層）は厚さ1~10cmで、遺存状態はあまり良くなく、圃場整備によって破壊されている部分も多い。3b・3c・3d層は無遺物間

層序	分 布	土 質	性 性	層序	分 布	土 質	性 性	
1 a	全域	黒褐色シルト(2.5Y4/1)	耕作土	T 7 - 131	灰褐色褐色土質シルト(2.5Y6/2)	上層地出		
1 b	T 4 - 50 - 60 75 - 131	暗灰褐色シルト(2.5Y4/2) オリーブ褐色細粒シルト(2.5Y6/3) 灰褐色シルト(2.5Y4/3)	耕作地 基礎土	はば金城	暗灰褐色砂質シルト(2.5Y4/2) 灰褐色土質土(2.5Y6/3) 灰白色粘土質シルト(10Y R6/1) 灰オリーブ褐色粘土質シルト(5Y6/2) 浅灰褐色シルト(5Y6/3)			
1 c	T 76	黒褐色シルト(2.5Y2/1)より黒	耕作土	3 b	3 c	黑色粘土(2.5Y2/1)ヒート	上層地出	
1 d	T 97 - 100	暗灰褐色シルト(2.5Y4/2)	耕作土	3 d - 1	3 d - 2	褐色褐色シルト(5Y R2/4)	上層地出	
2 a - 1	T 1 - 110 112 - 131	暗褐色細粒シルト(2.5Y5/3) 灰褐色シルト(2.5Y4/3)	耕作地 基礎土	121 - 131	121 - 131	褐色黃褐色土(2.5Y5/2) 灰白色粘土(10Y R6/1)	上層地山	
2 a - 2	T 87 - 108 部分的	黒褐色粘土質シルト(2.5Y3/2) 灰褐色シルト(5Y4/1)	耕作地 基础土	3 e	3 f	黒褐色粘土(2.5Y2/1)ヒート 褐色褐色シルト(5Y R2/4)	上層地出	
2 a - 3	T 91	黒褐色シルト(2.5Y3/2)	耕作地 基础土	3 g	3 h	褐色褐色土(10Y R6/1) 灰褐色土質シルト(5Y4/1)	上層地山	
2 b	T 90 - 111	黒褐色粘土質シルト(2.5Y2/1)より黒 黑褐色土質シルト(2.5Y3/1) 黑褐色土質シルト(10Y R1.7/1) 少ない	耕作地 基础土	4 a	4 b	T 42 - 99位 108 - 110	褐色褐色土(10Y R6/2) 黑褐色粘土(10Y R6/2) 黑褐色粘土(10Y R6/2)	下層包含層 黒褐色粘土
2 c	T 8 - 111	にじへ・黄色シルト(2.5Y6/3) 黄褐色細粒シルト(2.5Y4/1)	上層包含層 耕作地	4 c	4 d	T 1 - 131 (2)E金城	黒色シルト(2.5Y2/1) 暗灰褐色細粒土(2.5Y6/2) 暗灰褐色土質シルト(10Y R5/1) 灰褐色細粒土(10Y R5/1)	下層包含層 黒褐色粘土
2 d	T 109 - 111	暗褐色シルト(2.5Y5/3) 灰オリーブ色シルト(10Y R4/3)	耕作地 基础土	4 e	4 f	T 1 - 4 17 - 18	黄褐色土質土(2.5Y4/1) にじへ・褐色細粒土(10Y R4/3)	下層包含層 耕作地
3 a	T 8 - 79	黑色粘土質シルト(2.5Y2/1)より黒	上層包含層	5	5	全域	黒褐色粘土(5G6/1) 黑色沙質土(5Y7/6) 明褐色土質土(10B G7/1) 灰褐色粘土質シルト(2.5Y5/3) 灰褐色沙質土(10Y R5/6)	下層地出

表1 基本層序観察表

層で、3 b 層上面で上層遺構を検出する。そのうち 3 c・3 d・2 層は流木等の植物遺体を多く含む層で、谷地形の深い部分にみられる。これら間層は浅いところ (T 1~16・41~58) で 0~30cm、深いところ (T 32~40・66~91) で 40~70cm になる。下層の包含層 (4 z・4 a 層) は色調が黒色から灰色まで変化するが、特に炭化粒が混じる 4 z 層の広がる部分には縄文土器が多い。厚さは数 cm~20 cm 程である。下層遺構検出面の 5 層は礫・砂質土・粘土があり、深い所では礫の上に砂質土・粘質土が順に堆積する。5 層上面までの深さは場所によって大きく異なり、浅いところ (T 1~6・123~128) で 15~30cm、深いところ (T 28~40・65~115) で 100~150cm になる。

この他、T 79 から北では調査区中央に延びる現排水路の前身と思われる旧用水路が検出され、その埋土として 2 a-2・2 a-3 層を形成する。また、T 121~131 では 5 層まで到達する旧用水路埋め戻し土が厚く堆積しており、3 e・3 f 層を形成する。この部分では旧用水路は幅 20m 近くあり、河川に近い状態である。

### (3) 検出された遺構

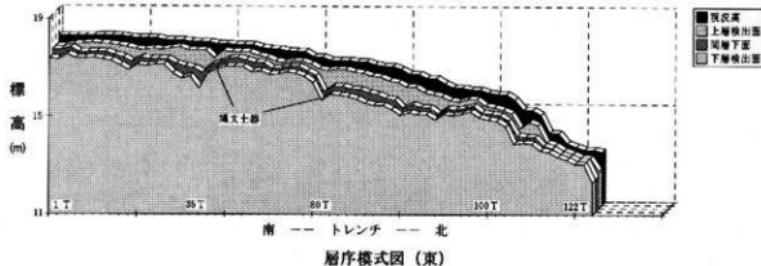
試掘調査の結果検出された遺構については、縄文・弥生時代の下層面と古代・中世以降の上層面に分けて記載する。

#### 1. 下層面

T 1 から 11 では遺構検出面 (5 層) まで 15~50cm 程度と浅く、1 層の直下に 4 a・5 層が露出する所が多い。遺構は弥生時代の溝数条、土坑約 10 基が検出され、T 3 の方形土坑は遺物量が多いことや貼り床状の堅固面がみられたことから住居跡である可能性がある。T 9 では浅い円形土坑から弥生土器片が出土している。遺物は 4 a 層中に含まれる。

T 7~12 ラインと T 42~36 ラインの間では地表からの深さ 70~90cm 程の谷があり、特に T 37~36 にかけて幅 20m、深さ 150cm 程の流路がみられた。ここでは 3 b・3 c・3 d 層が厚く堆積し、4 a 層は

層序模式図 (西)



層序模式図 (東)

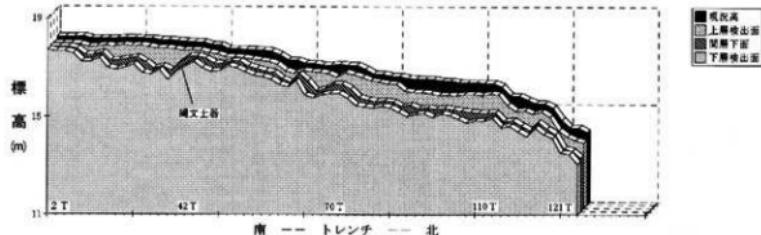


図3 南北方向層序断面模式図

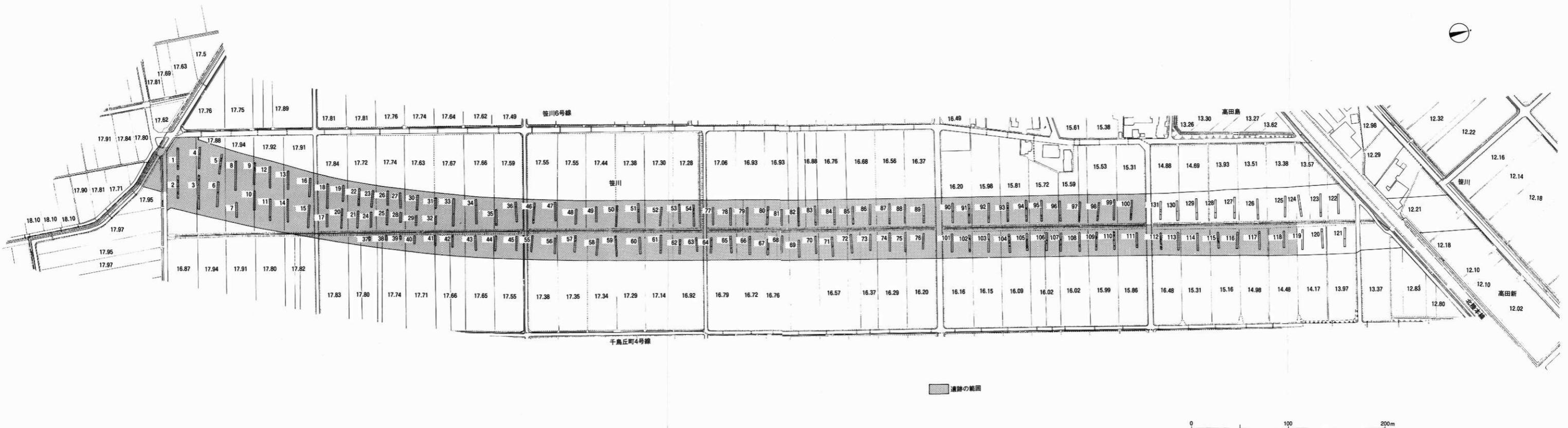
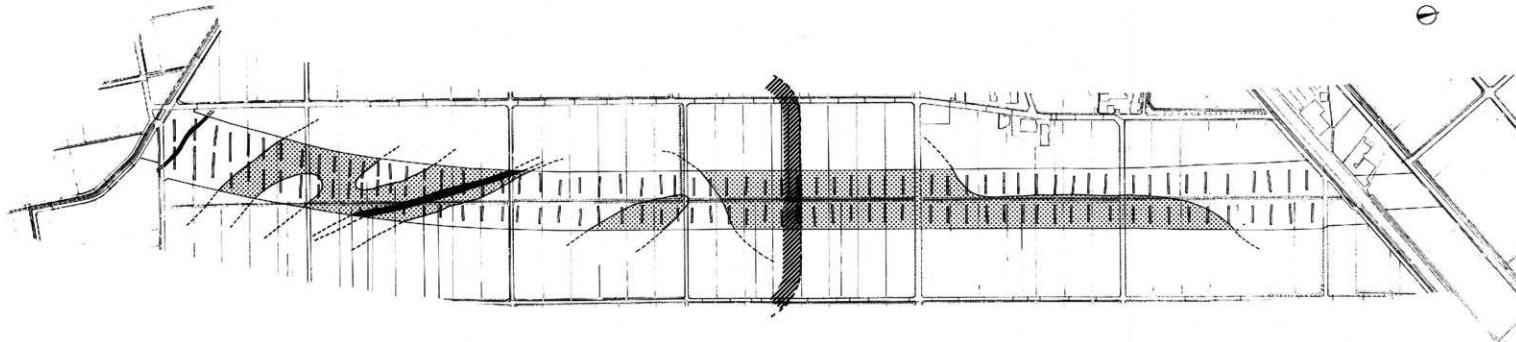
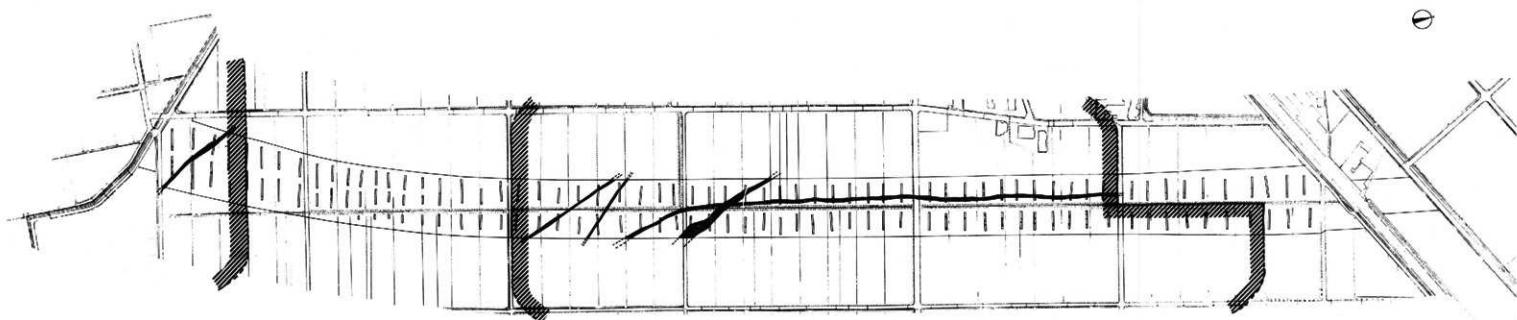


図4 試掘トレンチの位置と遺跡の範囲



黒文・弥生時代の遺構  
自然渓路(谷)  
黒文・弥生面の遺跡範囲

0 100 200m



古代・中世の遺構  
古代・中世面の遺跡範囲

0 100 200m

図5 上層、下層の遺跡の範囲

粘土質を帯びる。遺構は確認されなかったが、深い流路両岸の落ち際4ヶ所（T33・36・42・44）で4z・4a層中から縄文時代晚期の土器や打製石斧が一括出土している。平地から流路に向けて傾斜が始まったあたりからの出土で、土器・石器廃棄跡と想定される。特に深い流路は縄文時代に流れていたものと思われ、3a層までがレンズ状に堆積し、その上を2a-1層が一気に埋めている。谷、流路は南東から北西に向けて抜ける。

T42-36ラインからT66-78ラインまでは若干の微高地が続き、T46で溝が1条あるほかは縄文土器（T53・54）、弥生土器（T50・52・54・78）が若干みられる程度である。

T66-78ラインからT92-116ラインまでは再び深さ100-130cmの谷がみられる。この谷はT7-42でみられた谷が蛇行して戻ってきたものと想定される。谷の中央部では3b・3c・3d層の発達が良く、流木等の植物遺体が多くみられる。遺構は確認されなかったが、谷の縁辺部T79で、深さ125cm（5層上面）より縄文土器の一括出土がある。この場合は谷の落ち際ではなく、落ちきった場所での出土である。この他ではT87で弥生土器1片がみられるのみである。

T92-116ライン以北では遺構・遺物ともに検出されていない。4a層は薄く、5層までの深さも浅い。T118-131ラインより北は色激な傾斜地となり、段丘崖状を呈する。この比高差は約2mで、段丘崖状の部分は小矢部川の河岸段丘部に相当する可能性があり、南側から流れてきた谷との合流地点と想定される。

## 2. 上層面

下層面が自然地形等で起伏が激しかったのに対し、上層面（3b層上面）は安定した堆積を示す。表土から15-70cmで3b層上面に達し、平均30cm程である。下層面でみられた谷地形はほとんど埋没した状態である。検出された古代・中世遺構の分布はT1からT10とT46からT118の2ヶ所に集中し、近世以降の用水等が隨所にみられる。

T1からT10ではT2-5にかけて抜けると推定される幅10mの溝があり、底部から古代須恵器杯が出土している。T6では時期不明の溝がある。遺物はT1から5の間で古代土師器、須恵器、中世青磁・瀬戸美濃があるが、中世の遺構は明瞭ではない。

T10からT45にかけては古代・中世の遺構は検出されず、近世以降の溝が2条ある。T20-T22にかけて抜ける溝は幅6mで、園場整備前の用水と思われ、古代土器と伊万里が出土している。T39-T36にかけて抜ける溝は幅4m程で、表土直下にみられる。

T46から北側では古代・中世の溝・土坑・柱穴が多数検出されている。T46からT89までは規模の大きい溝が主体で、柱穴等は多くない。これに対し、T90からT118では小さな溝と柱穴が多くなる。この中で明らかに古代と判断できる遺構は少なく、溝3条、土坑1基のみである。柱穴・土坑には古代に属するものもあると思われるが、明確な確証がないため、ここでは時期不明なものは全て中世に属するものとして記載する。

古代の溝にはT56-T50に抜ける幅2~4mの溝、T61-T100に抜ける幅3m・深さ50cmの溝、T102の溝がある。T61-T100の溝は後述する園場整備前の旧用水と平行に進むため、多くの部分で破壊されている。古代溝の埋土は黒褐色を呈し、掘り込み面は3a層上面から下面にかけてである。遺物の量は多くないが、T61-T100の溝底部から土師器甕・甕、須恵器杯が出土しており、T84で出土した須恵器杯には「鳴家」「黒口」の墨書きがある。また、T91の土坑から土師器甕、T102の溝からは須恵器甕が出土している。その他、古代の遺物はT87~108付近の2b層中から多く出土しており、関連する古代遺構はこの周辺に存在する可能性がある。

T46~89までの中世以降の遺構では、規模の大きい溝にT59からT51に抜ける幅2mの溝、T64からT80へ抜ける幅8mの溝があり、掘り込みは2c層上面である。幅1m未満の溝はT54・67・71・72、土坑・柱穴はT54・64・72・76・82・87にみられるのみで比較的遺構密度の低い地域である。

T90から以北では幅1m未満の溝、土坑、柱穴が多くなり、この範囲で土坑23基、柱穴30基が検出されている。柱穴埋土には3a層起源と思われる黒褐色系と2c層起源の黄灰色（霜降り状）があり、黒褐色系のものは古代に属するものを含む可能性がある。黄灰色（霜降り状）のものは中世末から近世にかけてみられる埋土の特徴である。

T46からT118における中世以降の遺物は、遺構中からの出土ではなく、1b層中からの出土が多い。遺物の種類には土師器皿、珠洲、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里がある。

旧用水路跡についてはT79からT122までのトレンチ東端部でみられ、現排水路とほぼ平行に延びる。埋土中からはビニールや瓦が出土し、圃場整備時に埋められたことがわかる。特にT131~122にかけてはトレンチの半分が旧用水路で破壊されている。

圃場整備による削平はT112~131で激しく、特にT131~122では3b層中位まで削平されている。

#### (4) 小括

調査の結果、調査対象地のほぼ全域で縄文時代から近世までの遺跡の広がりを確認できた。遺構成面は下層（縄文時代・弥生時代）と上層（古代・中世・近世）の2面がある。以下、遺跡の範囲について概説する。

##### 1. 下層面

弥生時代の遺構はT1~10に集中し、これより北側では遺物が散漫に分布するのみである。弥生時代遺構の広がりは、平成4年当財團試掘調査の福岡町下老子遺跡の連続上にあり、T10を北限として切れるようである。

縄文時代の遺構は確認されていないが、T33からT79の間に縄文時代晚期の遺物が谷の落ち際に中心にして一括廃棄されている。このことからT15以南の高位面やT42からT65の高位面周辺に縄文時代集落が存在している可能性がある。

以上からT70・83ライン以南を下層面遺跡範囲として設定した。面積は42,000m<sup>2</sup>である。

##### 2. 上層面

古代・中世・近世の遺構掘り込み面は、2c層上面から3a層下面まで若干の差違がある可能性があるが、多くのトレンチで圃場整備等の影響を受け2c・3a層の遺存状況は良くない。従って遺構のほとんどが3b層上面で確認されることから、古代・中世・近世を一面（上層面）として認識する。

上層面の遺構はT1~10までとT46~118に集中する。明確な建物遺構は確認できなかったが、古代・中世・近世の集落が広がっているものと思われる。なお、T11~45までは圃場整備前の流路がみられるのみで遺跡の範囲から除外し、T118以北は圃場整備による削平が著しく同様に除外した。

以上から上層面の遺跡範囲をT1~10及びT46~118に設定した。面積は49,950m<sup>2</sup>である。

##### 3. 遺跡の範囲

下層面・上層面の遺跡範囲の設定から、上下2面が重複して存在する範囲は24,900m<sup>2</sup>となり、今回調査対象地76,800m<sup>2</sup>に対し、延べ91,950m<sup>2</sup>が本調査対象面積になる。ただし、上層面のT1~10の範囲については、上層と下層の間層がほとんどないため、実質的には一面になる部分も含んでいる。

なお、今回調査地に接する平成4年度調査の福岡町下老子遺跡については、今回の調査結果から同一遺跡として連続するものであるとの判断から、高岡市笠川遺跡と合併して下老子笠川遺跡とした。

（河西 健二）

## (5) 出土遺物

### 縄文時代の遺物 (図6の1~11)

遺物は晩期中葉から後葉にかけての土器（深鉢・鉢・壺）・石器（打製石斧5・横歯形石器1）がある。深鉢は、器形が外広する粗文で貝殻条痕を施す1・7と胴部が大きく膨らみ口縁部が内屈する9・10がある。9・10は両者とも口縁部に幅広沈線を巡らせ胴部は貝殻条痕を施す。また、10は口唇部を上から押しつけ小波状とする。条痕は胴部中央の接合部で横位、その外は斜条痕となる。鉢には、口縁部が内屈する器形の2・5と椀形の4・6がある。2は、工字文風の沈線文、5は逆「T」字状の文様を取り組ませた工字文が3段ほど確認できる。4は2~3条の沈線で交互に三角の文様を作り出して研ぎ、浮線文風にする。6は、幅5mmほどの条痕を横に綾杉状に施し、内面に条痕を施文後なで消す。両者とも外面赤彩で、6は口縁内面にも施す。8は、沈線を施す筒状の器形で外面赤彩。3は、広頸の壺と考えられ頸部に1条の凸線を巡らせ、その下に長さ約4cmで2条一対の凹線を弧状に連続施文する。胴部は貝殻条痕。これらは、大洞A式段階の土器と考えられる。11は、く状に外反する口縁の深鉢で外面は、ヘラケズリ調整を施す。大洞C1新~C2古式段階。（酒井 重洋）

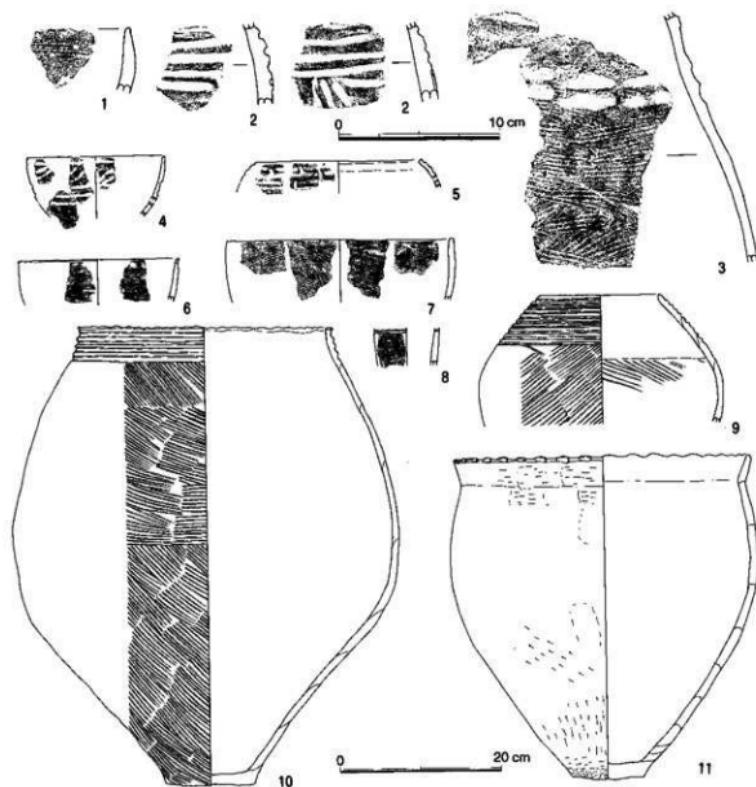


図6 縄文時代の遺物 1~9(T42), 10(T33), 11(T79) 1~3:1/3, 4~11:1/6

## 弥生時代から中世の遺物

### 弥生時代の遺物（図7の1～9）

弥生時代の遺物には上器、碧玉製の未完成品・剥片などがあるが量は少ない。出土位置は、1トレンチから16トレンチの調査対象地南側約170mに限定され、大規模な弥生時代の遺跡である下老子遺跡の北端に当たる。図示した遺物が図化できる遺物のほぼ全てである。

1・2は、壺の破片。1は有段口縁の壺で内外面赤彩、ヘラ磨き。2は「く」の字口縁で外面に刷毛目調整痕を残す。3・6は甕の破片。3・6は有段口縁の甕で6は8条以上の浅い擬円線を施し、内面には指頭圧痕を残す。4は口縁端部を広げた甕で4条の深い擬四線が巡る。5は短い「く」の字口縁で端部は鋭角で面取り状。7は蓋の破片で、内外面にヘラ磨きを施す。9は高杯の脚部破片。

### 古代の遺物（図7の10～15）

古代の遺物には須恵器、土師器があり、須恵器の器種は杯A・B、土師器には杯A、碗A、甕がある。出土量は少なく図示したものが全てである。出土位置は調査対象地のほぼ全域から散発的に出土しているが比較的まとまるのが中央部付近である。10・11が南側、12～15は中央部からの出土。

10は口径12.4cm、底部外面に「十」のヘラ書きされた8世紀代の杯B。11は七輪器碗Aの小破片で、底部外面は回転糸切り未調整。11・12は同一トレンチから出土した須恵器杯Aで底部外面に墨書きが認められる。11は口径12.2cm、高さ3.3cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整で、中央部に「鳴家」と墨書きされる。「鳴家」は施設名を指すと考えられる。12は口径12.4cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり底部内面との境に窪みをもつ。底部外面左下に「黒□」と墨書きする。15も12・13と同様に同一トレンチ出土の土師器杯Aで、口径11.6cm、高さ3.3cmを測る。底部外面には右回りの回転糸切り痕を残す。14は土師器小型甕の体部下半の破片で、内外面に煤が付着する。底部外面は回転糸切り未調整である。12～15の時期は9世紀中頃から後半代であろう。

### 中世の遺物（図7の16・17）

中世の遺物には珠洲、中世上師器があるが量は少ない。図示した16は肩に描画文をもつ壺か甕の小破片。17は片口鉢で底部外面に静止糸切り痕を残す。時期は珠洲I期かII期であろう。（池野 正男）

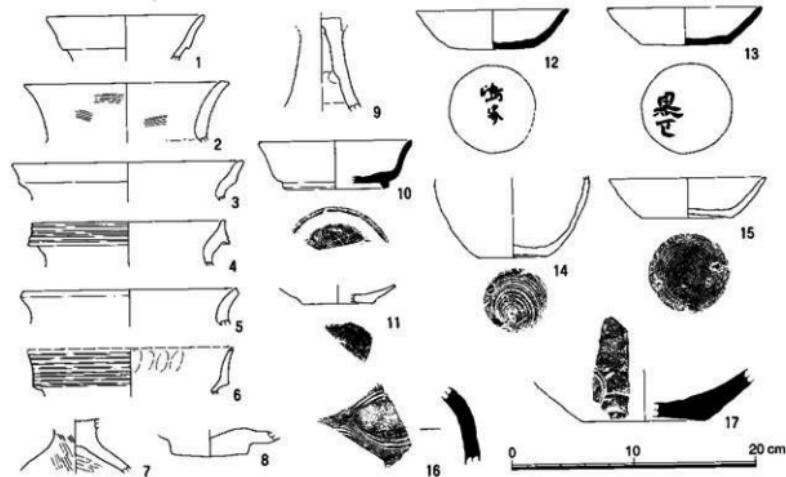
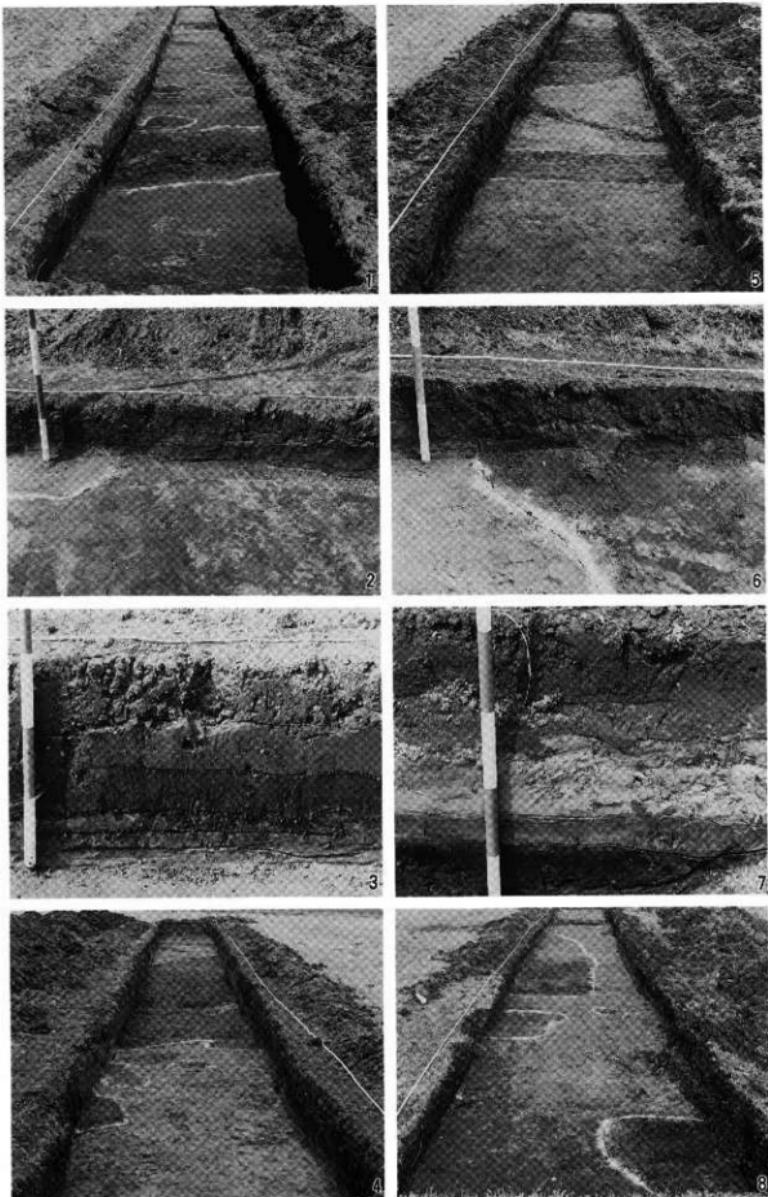


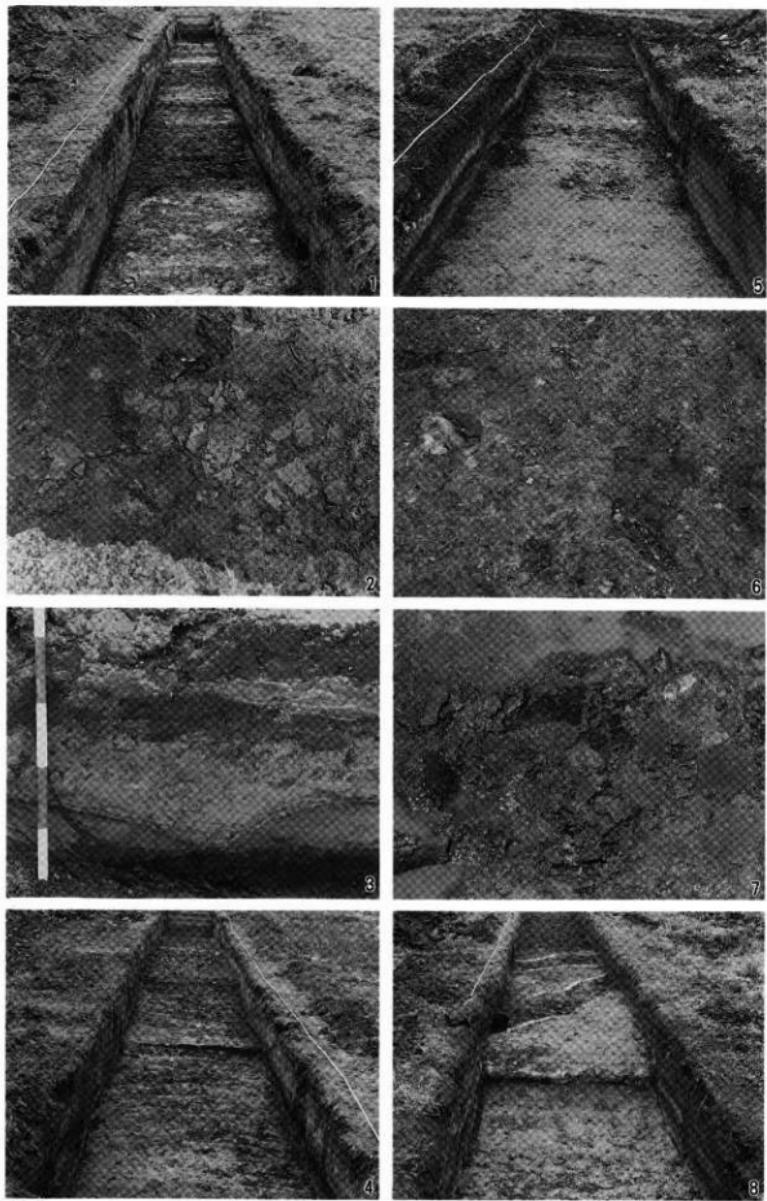
図7 弥生時代から中世の遺物（1/4）



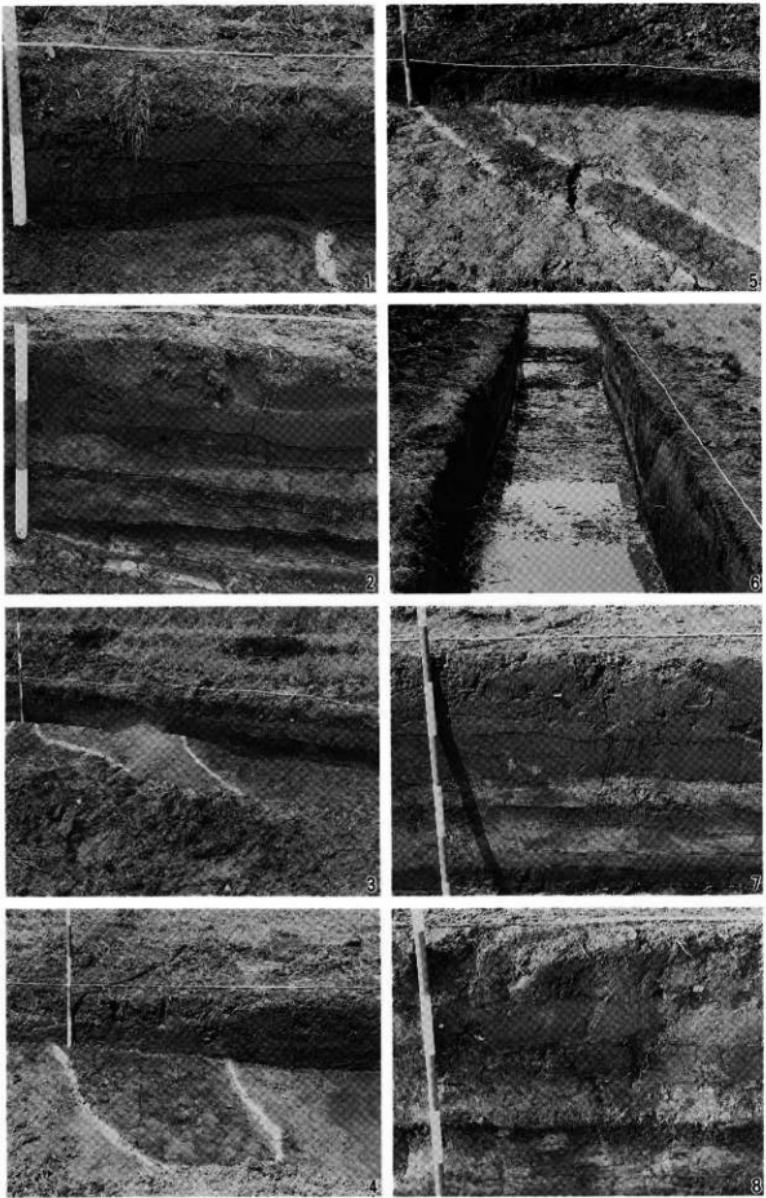
図版 1 1. 全景(南から) 2. 全景(北から)



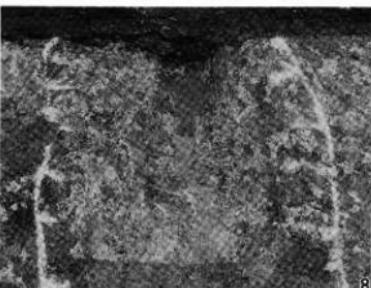
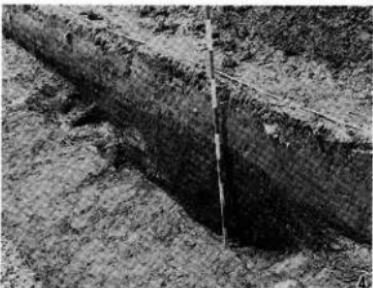
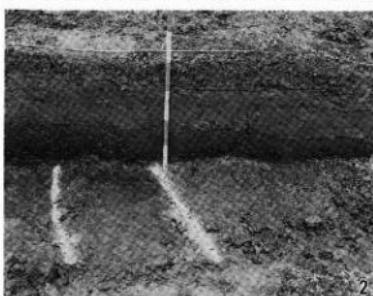
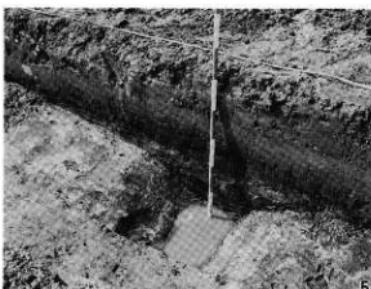
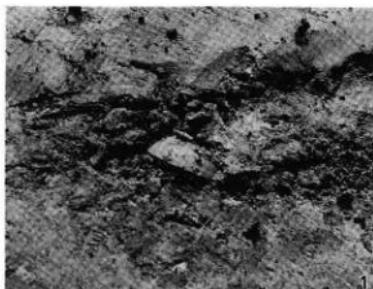
図版2 1, 3トレンチ 2, 同土層 3, 4トレンチ土層 4-5, 5トレンチ 6, 6トレンチ 7, 7トレンチ 8, 9トレンチ



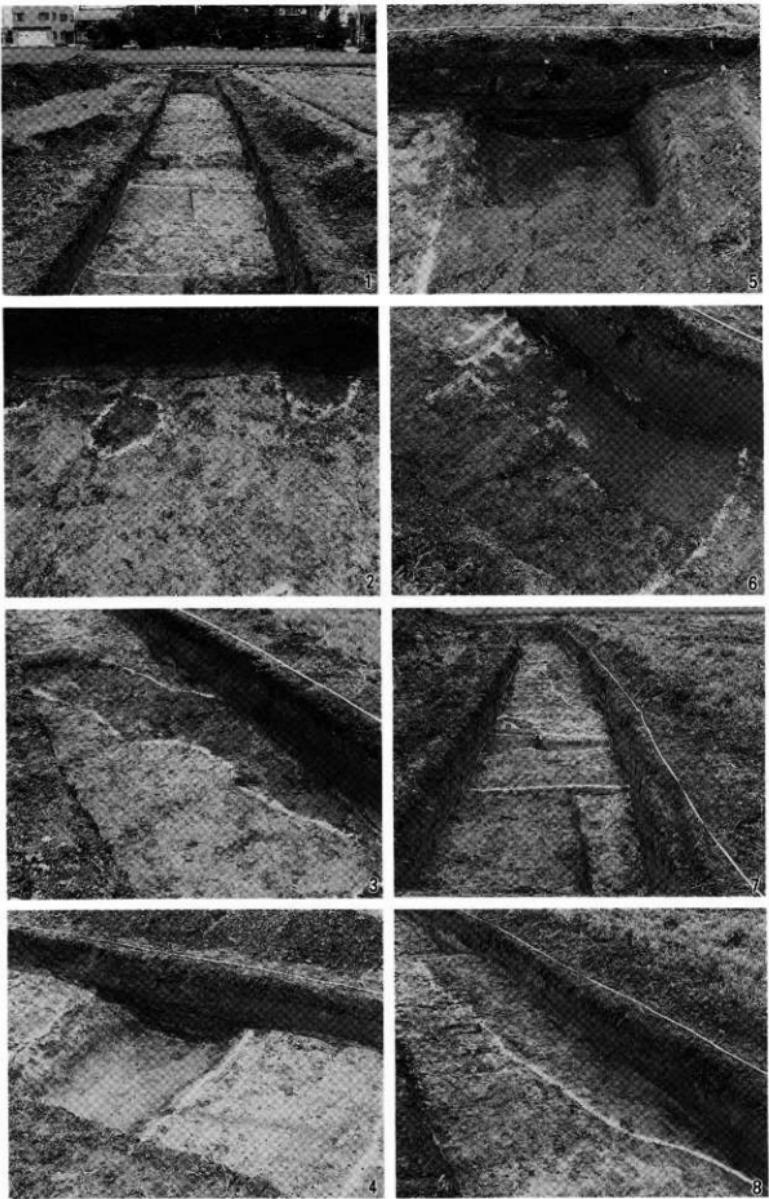
図版3 1. 33トレンチ 2. 同遺物出土状況 3. 同上層 4. 36トレンチ 5. 42トレンチ 6. 同遺物出土状況  
7. 49トレンチ遺物出土状況 8. 50トレンチ



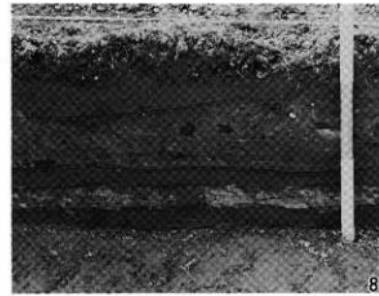
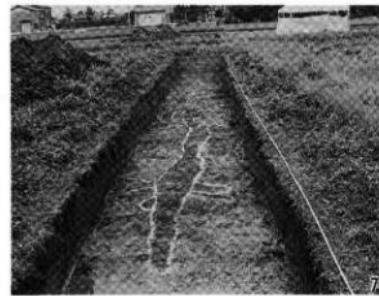
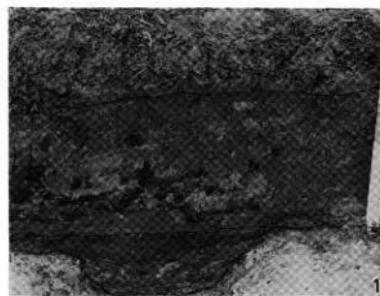
図版 4 1. 50トレンチ土層 2. 51トレンチ土層 3. 54トレンチ 4. 64トレンチ 5. 67トレンチ 6. 82トレンチ  
7. 同土層 8. 84トレンチ土層



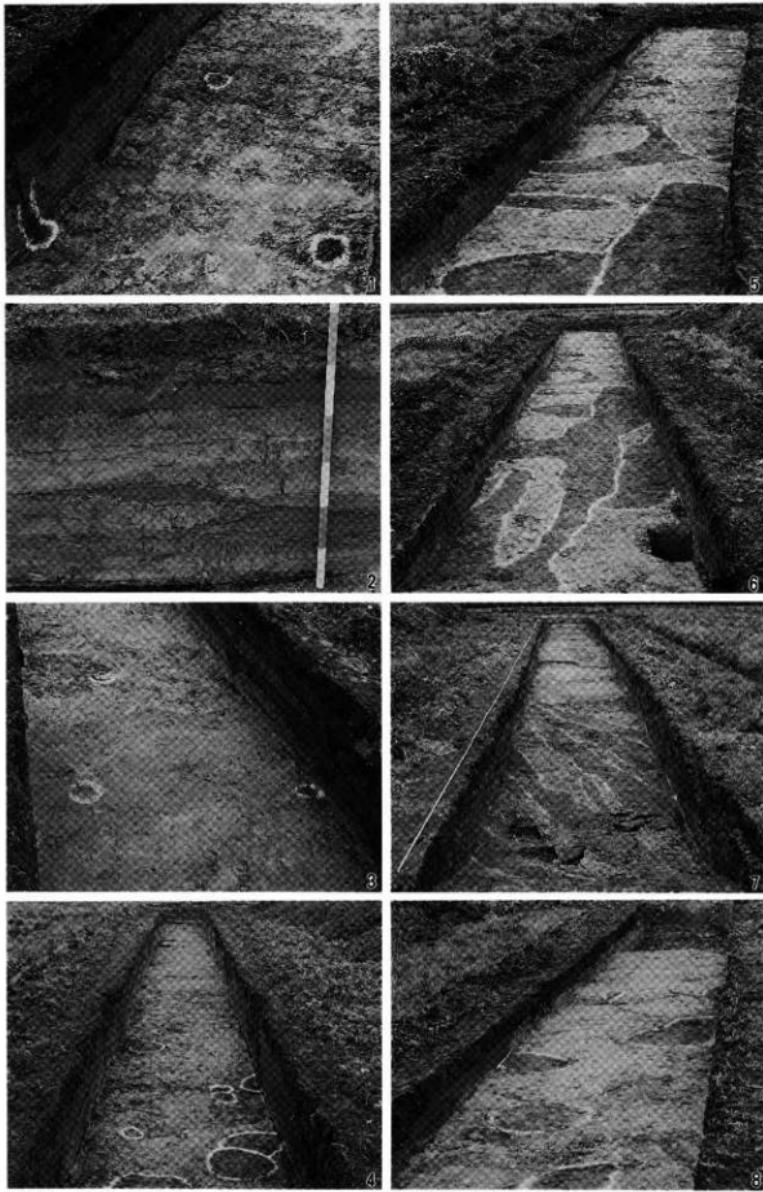
図版5 1. 84トレンチ遺物出土状況 2. 86トレンチ 3・4. 87トレンチ 5. 89トレンチ 6. 90トレンチ  
7. 91トレンチ 8. 92トレンチ



図版 6 1-3 , 94トレンチ 4-5 , 95トレンチ 6 , 96トレンチ 7-8 , 97トレンチ



図版7 1. 97トレンチ 2. 102トレンチ 3・4. 103トレンチ 5~7. 105トレンチ 8. 同上層



図版 8 1・2, 108トレンチ 3, 109トレンチ 4, 110トレンチ 5・6, 112トレンチ 7, 114トレンチ 8, 117トレンチ



9



10



11



2



2



5



4



4



4



3



8



7



1

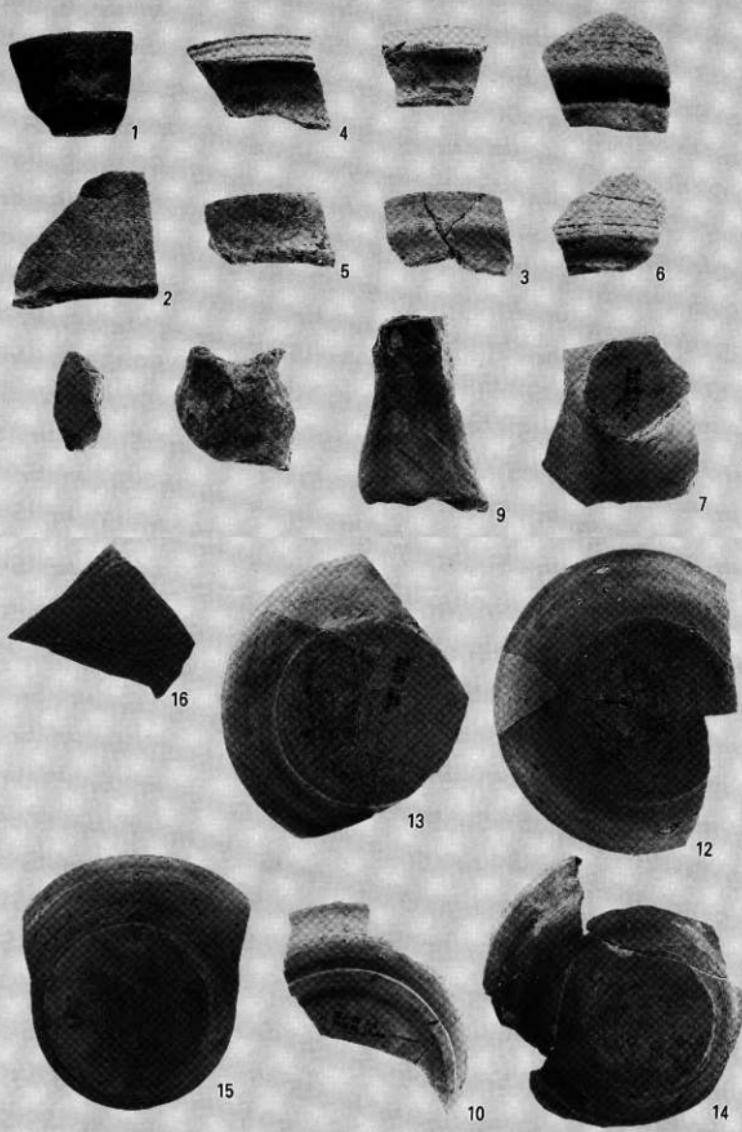


6



7

図版 9 桶文時代の遺物 (9-11: 1/6, 他は 1/3)



図版10 癸生時代から中世の遺物 (1/2)

## 報告書抄録

ふりがな	能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告・N E J 08遺跡-					
書名	能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告・N E J 08遺跡-					
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告					
シリーズ番号	第6集					
編著者名	池野正男、油井重洋、河西健二					
編集機関	財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所					
所在地	〒930 富山県富山市五福4384番1号 TEL.0764-42-4229					
発行年月日	西暦1995年3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 調査原因
N E J 08 高岡市並川	16202	176	36° 42° 30°	136° 57° 30°	1995.06.06 1 1995.07.04	76,800 (対象 面積) 能越自動 車道建設 に伴う現 地調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
N E J 08	集落跡	縄文晩期		土器・石器	下老子遺跡と連 絡する	
		弥生後期	溝・土坑	土器・玉木成品	がりド老子並川 遺跡とする	
		奈良・平安	溝	須恵器・土師器		
		中世		珠洲・中世土師器		

### 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第6集

### 能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告

— N E J 08 遺跡 —

編集・発行 財團法人富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

〒930 富山市五福4384番1号  
TEL.0764-42-4229

発行日 1995(平成7)年3月31日

印刷 刷 日興印刷株式会社